

# 北から南から

図書館雑誌では、「北から南から」欄への会員のみなさまからの投稿をお待ちしています。館界や本誌へのご意見、個人やグループなどの活動報告、研究成果、また、日常業務の中で工夫していることなどを、下記の要領でお寄せください。

★字数：1200～3800字程度（図版・写真を含む）

★様式：400字詰め原稿用紙またはワープロを使用

★送り先：〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

日本図書館協会 図書館雑誌編集委員会「北から南から」係  
(FAX (03)3523-0841でも受け付けいたします)

## 住民による図書館支援のあり方： 業務支援が先行する危うさ

吉田 右子

### 1. 住民による図書館支援とは

さまざまなボランティア活動が活発に展開される中で、近年、図書館ボランティアにも多くの人々が参加するようになってきている。図書館は年齢にかかわらずだれもが利用者として利用できる公共施設であること、生涯学習の拠点であることなども、図書館ボランティアの魅力と結びついているのであろう。また小・中学校での読み聞かせボランティアや学校図書館のボランティアの数も増加している。

#### 1.1 図書館支援の3タイプ

地域に根ざした市民の知的活動の拠点である公共図書館は、地域住民との緊密な関係を保ちながら発展してきた。住民側からの図書館への働きかけは、図書館利用および図書館支援にかかわるさまざまな形が可能であり、図書館ボランティアはその活動例の一つである。

住民による図書館支援には(1)図書館の業務に直接携わり、図書館活動を支援する活動、(2)図書館の業務に直接関わらず、利用者の代表として図書館に住民側の希望を伝えたり、図書館と住民の仲介者として図書館のさまざまな活動を住民に紹介する活動、(3)両者の混合のタイプがある。日本では(1)のタイプすなわち図書館の業務支援活動の導入例が多く、住民による図書館支援の中核となっている。

しかし図書館ボランティアの行う業務支援活動は、図書館支援活動の一部にすぎない。たとえば住民による図書館支援の長い伝統を持つアメリカでは、図書館友の会と呼ばれる組織が、図書館に対する住民の働きかけに関して中心的な役割を担ってきた。友の会活動の主たる目的としてファンドレイジング（資金調達活動）が掲げられているのはアメリカ社会特有の支援形態といえるにせよ、全体的にみれば(2)のタイプの活

動が多い<sup>1)</sup>。アメリカ図書館友の会では、コミュニティにおける図書館の社会的認知の向上を目指す活動が中心であり、図書館業務支援は数としてはむしろ少ない。

#### 1.2 業務支援が先行する危うさ

日本における図書館ボランティアの活動領域は、館内整備、利用者への案内サービス、資料整理業務など多岐にわたる。そのほとんどが無償あるいは低報酬の労働であるにもかかわらず、ボランティアは熱心に活動に取り組み実績を積み重ねてきた。地域社会全体でのボランティア活動やNPO活動も、図書館ボランティアの活性化の背景となっている。

一方、公立図書館を取り巻く環境は厳しく、財源および人的資源の不足は公立図書館運営に大きな影を落としている。そうした状況で市民やボランティアによる図書館経営への参加可能性を検討する議論が高まり、住民の自発的活動への一定度の期待が示されるようになってきた<sup>2)</sup>。さらに図書館ボランティア活動の高まりとともに、その活動を本来図書館専門職が行うべき活動の一部として組み込む例も見られるようになった。こうした傾向に対し図書

館ボランティアの間では、ボランティアが安価な労働力としてみなされることへの危惧が高まっている。

図書館におけるボランティア活動は必ずしも図書館側が期待する部分を埋めるものとは限らず、その活動はあくまでも住民の自発性に委ねられている。個人の主体的な意思によって行われるボランティアは、本源的に多様なものであり、そうした多様性は図書館活動を豊かにするとともに、図書館側との葛藤を生み出す可能性をも含んでいる。図書館におけるボランティア活動を今後さらに発展させるためには、図書館とボランティアの協力関係だけでなく葛藤、対立といった関係をも含め相互の働きかけを詳細に検討していく必要がある。

### 1.3 図書館支援活動をめぐる議論と問題の所在

活動の高まりとともに図書館ボランティアに関わる議論も盛んになってきた。しかしながらそこでは実践面に焦点が当てられ、活動を進める上で頻出する問題や組織作りなど実務上の課題が議論の中心となっている。一方、図書館支援者／図書館ボランティアの存在自体についての議論はほとんど行われていない。

そうした議論の欠如とも関連するのであろうが、日本における図書館と地域住民のかかわりについては、実践報告と状況分析にとどまり理論研究として深められてこなかった。その結果、わが国ではボランティアが各図書館で積極的に導入され活動範囲が広がるなかで、理論的根拠が明確に提示されずに実践が先行し、その活動の理念的基盤はきわめて不安定なものとなっている。図書館側

は明確な理念や実践方針を示すことなくボランティアに期待を寄せ、ボランティア側も確固たる活動理念を持ち得ないままに図書館活動に携わるという場合もある。これは海外の図書館支援組織において、活動の目的と方針・理念が明確にされている状況とは対照的であると言わざるをえない。

ところで住民による図書館支援に関して、わが国には1960年代後半から1970年代にかけて行われた図書館作り運動の歴史がある。しかしながらそうした運動の蓄積が現在の図書館ボランティア活動の理念と実践に十分に受け継がれているわけではない。とりわけ近年盛んになった業務支援型図書館ボランティア活動は、社会活動としてのボランティア活動への認識の高まりとともに急速に発展し、過去の活動の歴史とは切り離された新しい活動として実践されている。

## 2. 図書館支援の理論的基盤構築のために

住民による図書館支援には明確な理念が必要であるが、それは必ずしも海外の図書館支援の理念と同じものにはならないだろう。日本の図書館の状況を踏まえた独自の理念を確立するためには、少なくとも二つの作業が必要である。1番目は現在行われている図書館ボランティア活動の総合的な解明であり、2番目に現在の図書館ボランティア活動を、地域住民と公共図書館の歴史的なかわりという文脈のなかで検討することである。二つの作業を通じて、住民による図書館支援を図書館実践のなかに明確に位置づけることができれば、最終的には図書館と市民の関係

を支えるあらたな理論を導出することが可能である。

### 2.1 図書館ボランティア活動の総合的解明

1番目の作業の中心となるのは、現在の図書館ボランティア活動実践を整理・分析し、わが国の図書館ボランティア像を浮かび上がらせることである。とりわけ活動を通じて発生するさまざまな課題とその克服の過程は、図書館ボランティアのあり方を考える上で貴重なデータとなる。ボランティアが行っている活動を抽出し、個々の活動について活動理由やその必然性について細かく検討する必要がある。こうした作業を進める上で重要な手がかりとなるのは活動者による実践記録である。

またボランティア活動にかかわるコミュニケーションは、現状のあり方を参照し検討すべき課題である。たとえば図書館ボランティア活動では住民がさまざまな形で活動に参加し、図書館の活動歴の長さや関わりへの深さは多様である。ボランティア活動は、参加者が固定されてしまうと組織としての活力が失われ、新しい参加者が組織に入ると従来の参加者との軋轢と葛藤が生じるという課題を常に抱えている。しかし図書館ボランティア活動において、多様な参加者の許容はボランティア活動の原則であると同時に、利用者を規定しない公共図書館の本質と深く結びついている。参加者の多様性を図書館の可能性に結びつけて考えていくべきである。

またボランティアと図書館職員の関係構築は、図書館ボランティア活動の基盤である。両者の明確な役割分担、協力関係の下で図書館支援活

動と図書館専門業務（ライブラリアンシップ）は相乗効果をもたらす。ここでボランティアは原則として図書館の活動方針に従って図書館支援活動を進めていくのであるが、それはボランティア活動者の主体的な意思を否定するものではない。両者は図書館の持つ課題をはさんで常に向き合い、関係を模索していかなければならない。

図書館ボランティアをめぐるコミュニケーションの底流には、他者の文化を学びあうという理念が貫かれている。異なる社会属性のボランティア同士、あるいは利用者と専門職の立場といった異文化がぶつかる時、そこには必ず葛藤と対立が生じる。それらを実践的な解決に縮小してしまうのではなく図書館支援の根源的問題としてとらえる姿勢が必要ではないだろうか。

## 2.2 図書館支援活動の源流

現在の業務支援型の図書館ボランティアが急増したのは、1990年代に入ってからである。しかし日本では、1960年代から相次いで各地に設立された家庭文庫を基盤として、図書館設立や図書館サービスの向上を働きかける住民運動があり、図書館活動に参加する住民の動きはすでに1970年代に芽生えている<sup>3)</sup>。図書館作り運動は図書館行政の貧弱さを映し出すものであったにせよ、図書館設置率の増加、利用者の増加など日本の公共図書館の土台となる成果を生み出した。また現在の図書館支援者には図書館作り運動の経験者が多く、長期にわたる図書館の児童サービスの向上への貢献は特筆すべきものがある。図書館作り運動は、図書館ボランティア活動の源流とみなす

ことができる。しかしながらこうした運動の理念が現在の図書館ボランティア活動に十分に受け継がれているとはいえない。過去の図書館作り運動と現在の活動は実践面で連続しているにもかかわらず理念の継承という点で断絶している。

図書館作り運動が運動の過程で蓄積した経験と活動理念は、図書館サービスの存在意義を説明するために参照されるべきものである。図書館作り運動について多くの活動記録や報告書があるにもかかわらず、そうした記録を用いた体系的な論考はなく、図書館史における研究領域としても未開拓なまま取り残されている。

## 3. 住民による図書館支援の本質

わが国の図書館作り運動は市民生活を営む上で必然的な活動であり、その成果を高く評価すべきである。しかし住民側が強く働きかけなければ基本的な図書館サービスを受けられなかったという事実は、図書館政策の貧困を示すものにほかならない。いずれにせよ、わが国において業務支援中心のボランティアが、図書館サービスの充実のために今後も重要な役割を果たしていくことは明らかである。そして図書館ボランティア活動が、図書館サービスの欠落部分を補う性格を帯びたものになっていくことが同時に危惧されているのである。

こうした事実を踏まえ私たちが考えなければならないのは、より本質的な活動としての住民による図書館支援である。たとえば専門職による充実した図書館サービスが提供されてきた北米、イギリスなどの国々に

おいても住民による図書館支援が行われてきた。そうした国々の図書館支援のあり方を見ていくことで、住民と図書館の関係性や図書館支援の本質が浮かび上がってくる。支援者たちはコミュニティの他の施設、機能によって代替できない文化的機関として図書館をコミュニティのなかに位置づけ、それを確たるものにしようとする活動をしてきた。彼らはある意味で最も活発な図書館利用者なのであり、コミュニティの図書館に対する明確な希望を抱き理想像を描いている。図書館支援者の存在そのものが実は、コミュニティの図書館存立のための最も強固な論拠となりうるのである。

\*

本稿は2006年3月24日に横浜市中心図書館で開催された「よこはまライブラリーフレンド10周年記念シンポジウム」で行った報告に基づくものである。

注

- 1) 次の文献はアメリカにおける図書館支援をファンドレイジングに着目して論じている。①福田都代「アメリカの図書館におけるファンドレイジング」『図書館界』vol.56, no.5, 2005, p.274-292. アメリカの図書館友の会についての概要は次の文献がある。②吉田右子「図書館ボランティア」根本彰ほか編『図書館情報学の地平』日本図書館協会, 2005年 p.245-250.
- 2) 荻原幸子「公共図書館サービスにおけるガバナンス概念の適用：住民セクターとの新たな関係性の構築に向けて」*Library and Information Science* No.51, 2004, p.4.
- 3) 吉田右子「1960年代から1970年代の子ども文庫運動の再検討」『日本図書館情報学会誌』Vol.50 No.3, Sept. 2004, p.103-111.

(よしだ ゆうこ：筑波大学大学院  
図書館情報メディア研究科)  
[NDC9：016.2 BSH：  
1.図書館(公共) 2.ボランティア活動]